

平成26年度 微生物学教科担当教員会議 議事録(日本薬学会135年会、神戸)

日時:平成 27 年 3 月 25 日 12 時～13 時

場所:神戸学院大学 B 号館 2 階・E 会場(B215)

出席者:全国大学薬学部において微生物学教育に携る教員 49 名

配布資料

- 1) 平成 26 年度微生物学教科担当教員会議議題
- 2) 微生物学教科担当教員名簿(資料 1)
- 3) 平成 26 年度微生物学教科担当教員会議出席予定者名簿(資料 2)
- 4) 日本薬学会主催第 27 回微生物シンポジウム(資料 3)
- 5) 生体膜と薬物の相互作用シンポジウム
- 6) 新コアカリキュラム実施に伴う微生物関連科目の対応に関するアンケート結果(資料 4)
- 7) 薬学微生物教員会議会則(資料 5)

11時20分入場、12時過ぎ開会となった。大阪大谷大学 谷佳津治(平成26年度 微生物学教科担当教員会議 事務局)の挨拶があり、谷の司会で議事進行が行われた。

議題

1. 平成27年度 微生物学教科担当教員会議 事務局担当について

北里大学 供田洋先生から、平成28年3月26～29日 日本薬学会第136年会(パシフィコ横浜)の際に平成27年度微生物学教科担当教員会議を開催し、その事務局を供田洋先生(北里大学)が担当する旨を述べられた。

2. 微生物シンポジウムについて

就実大学 塩田澄子先生から、微生物シンポジウムへの参加、活性化のお願いがなされた。平成27年度は、就実大学 塩田澄子先生ならびに岡山大学 黒田照夫先生が世話人を務められ「微生物薬学の未来に向けた研究と教育のあり方」を標題として、平成27年9月4～5日に就実大学にて開催されることを述べられた。微生物薬学の分野で活躍される様々な職種の方に講演して頂き、微生物薬学で求められる人材とその資質を探る狙いであると述べられた。

3. 生体膜と薬物の相互作用シンポジウムについて

熊本大学 伊藤慎悟先生(大槻純男先生の代理)から、第37回生体膜と薬物の相互作用シンポジウムへの参加のお願いがなされた。本シンポジウムは日本薬学会物理系薬学部会が主催し、熊本大学 大槻純男先生が実行委員長として、平成27年11月19～20日に、熊本大学薬学部 大江キャンパスで開催される。特別講演として、熊本大学 西中村隆一先生が「試験管内で腎臓を創る」というテーマで講演されること、シンポジウム1「生体膜から産生される生理活性脂質の最前線;創薬への考察」では4名の先生、シンポジウム2「生体膜と微小環境情報に基づく次世代DDSを用いた治療戦略の構築」では5名の若手の先生が講演されることを述べられた。また一般シンポジウム講演については後日開設するホーム

ページで案内して募集すること、ポスターセッションの開催も検討中であることを述べられ、参加のお願いがなされた。

4. コアカリキュラム改訂に関するアンケート調査結果について

大阪大谷大学 谷佳津治から平成27年1～2月に実施したコアカリキュラム改訂に関するアンケート調査について、その趣旨と結果の説明が行われた。国公立8校・私立30校から得られた回答内容について紹介され、主な調査結果を下記に示す。

①「微生物学」の開講時期：

「微生物学」は2年次に開講し、その履修後に「化学療法学」や「感染症学」などを開講している大学が多い。「免疫学」は「微生物」と同時または後に開講される大学が多い。

②コアカリ改正に伴う科目単位数の増減：

コアカリ改正に伴い、科目・単位数を変更する大学よりも、変更しない大学の方が多い。

③コアカリ改正に伴うSBOsの削減内容：

「微生物による抗生物質生産の過程を概説できる」(知識)、「代表的な動物ウイルスの培養、定量法について説明できる」(知識)、「沈降、凝集反応を利用して抗原を検出できる(技能)」などを削減する大学が多かった。一方、「主な消毒薬を適切に使用する」(技能・態度)、「主な滅菌法を実施できる」(技能)はいずれの大学でも実施される。

④薬理・病態・薬物治療の領域におけるSBOsの記述が薬剤中心から感染症になったことに伴う変更：

感染症や病原微生物に関する内容を増やすと回答した大学が10校、内容を変更しない大学が11校であった。

⑤その他コアカリ改正に関する対応：

総じてSBOsがなくなってもアドバンストとして講義で扱うなど、コアカリ改正後も講義内容は概ね変更しないとする大学が多く見受けられた。

5. 会則について

H25年度の微生物学教科担当教員会議などで立命館大学 土屋友房先生から、薬学微生物学教員会議の会則の内容を会員で共有すべきとの提案があったのを受け、大阪大谷大学 谷佳津治から会則を配布したとの説明があった。会則について何か意見があれば、連絡して頂きたい旨が述べられた。

6. その他

①事務局について

大阪大谷大学 谷佳津治から、薬学微生物学教員会議からの情報発信を促進するために、事務局は毎年の持ち回りよりも一定期間固定した方がよいのではないかと提案があった。

②大学院について

東京大学 関水久先生から大学院について下記の意見が述べられた。

・薬学部の機関としての大きな意義は、薬剤師養成であること、加えて薬剤師教育に必要なすべての専門領域の学問を発展させることにある。この観点から、大学院を充実させる必要がある。

・しかしながら、6+4年制を設置している大学院では、学生が集まりにくい現状がある。学生が集まらず、事実上大学が消滅すれば、薬学部は薬剤師養成のみの専門学校のようにになってしまうため、対策が必要である。

・研究できない状況で薬学教育を行うことは難しいのではないかと考え、学生を集めるための方法としていくつか提案したい。

提案：私立大学では、社会人の薬剤師を集めてその論文指導を行うための何らかの提案をしていく必要がある。また、海外の大学院では世界中から学生を集めている場合が多いので、そのようなシステムを大学に認めさせる必要があるのではないか。さらに薬学部出身以外でも入学できる制度を推進すべきではないか。

これに対して以下の意見が述べられた。

徳島文理大学香川薬学部 大島隆幸先生：

・薬学部では女子学生が多い。博士号をとった女子学生の今後はどうあるべきか？将来の不安のために、大学院修了後の道筋を考えて欲しいという意見もある。

北里大学 伴田洋先生：

・博士号を取得した女性の活躍の場を増やすために、「例えば教授の半分は女性でなければならない」といった制度があってもよいのではないか。

・社会人は大学院で実験する時間が十分でないため、企業側の理解が必要である。

・忙しい人でも研究ができる環境作りが不可欠である。研究を推進するために科研費の金額を一桁増やし、人を雇えるくらいの金額が必要ではないか。教員の給料もあげるべきだと考える。また研究者になるためには、ポスドク経験必須などの制度導入も日本では必要ではないか。

新潟薬科大学 中村辰之助先生：

現状では6+4年制の大学院で博士号を取得して、教員となる人数が少ないように思える。教員ポストの補充をするなどの対策が必要ではないか。

東京大学 関水久先生：

・女性が博士号をとることにそれ自身に意義がある。九州大学や東京大学の場合では、基本的に進路は学生自身が考えるべきことなので、教員が考えなくてもよいという立場であった。

・人生を面白く生きるためには博士号が必要であり、世界では博士号取得の有無で社会的地位に違いがある現状を学生に認識させていく必要がある。

・博士号をとった女子学生を受け入れるための社会作りは重要である。

・大学で研究の種を作って、バイオベンチャーで成功するケースを作ることで、学生に夢を与えたい。

・関水先生がチーフエディターとして創設した雑誌がある。コメントをのせて発信することが可能なので、メールでも良いので意見を寄せて欲しい。

以上

平成26年度 微生物学教科担当教員会議（日本薬学会135年会）

平成 27 年 3 月 25 日（水） 12:00～13:00
神戸学院大学 B 号館 2 階・E 会場（B215）

配布資料

- 1) 平成 26 年度微生物学教科担当教員会議議題
- 2) 微生物学教科担当教員名簿（資料 1）
- 3) 平成 26 年度微生物学教科担当教員会議出席予定者名簿（資料 2）
- 4) 日本薬学会主催第 27 回微生物シンポジウム（資料 3）
- 5) 生体膜と薬物の相互作用シンポジウム
- 6) 新コアカリキュラム実施に伴う微生物関連科目の対応に関するアンケート結果（資料 4）
- 7) 薬学微生物教員会議会則（資料 5）

議題

1. 平成 27 年度 微生物学教科担当教員会議事務局について
（北里大学 供田 洋 先生）
2. 微生物シンポジウムについて（資料3）
（就実大学 塩田 澄子 先生）
3. 生体膜と薬物の相互作用シンポジウムについて（資料有）
（熊本大学 伊藤 慎悟 先生）
4. コアカリキュラム改訂に関するアンケート調査結果について（資料4）
5. 会則について（資料5）
6. その他

大学	氏名
北海道薬科大学	若命 浩二
岩手医科大学薬学部	西谷 直之
東北薬科大学	久下 周佐
奥羽大学薬学部	堀江 均
いわき明星大学薬学部	金 容必
城西国際大学薬学部	平田 隆弘
帝京平成大学薬学部	斎藤 浩美
北里大学薬学部	供田 洋
北里大学薬学部	猪腰 淳嗣
昭和大学薬学部	石野 敬子
明治薬科大学	池田 玲子
昭和薬科大学	井上 能博
東京大学大学院薬学研究科	関水 和久
横浜薬科大学	細野 哲司
新潟薬科大学薬学部	中村 辰之介
富山大学薬学部	守田 雅志
北陸大学薬学部	村山 次哉
北陸大学薬学部	松原 京子
岐阜薬科大学	杉山 剛志
静岡県立大学薬学部	三宅 正紀
名古屋市立大学大学院薬学研究科	今川 正良
名城大学薬学部	二改 俊章
金城学院大学薬学部	小幡 由紀
愛知学院大学薬学部	森田 雄二
立命館大学薬学部	木村 富紀
同志社女子大学薬学部	川崎 清史
京都薬科大学	後藤 直正
大阪大学大学院薬学研究科	一條 知昭
大阪薬科大学	辻坊 裕
大阪薬科大学	土屋 孝弘
摂南大学薬学部	伊藤 潔
神戸薬科大学	小西 守周
兵庫医療大学	前田 拓也
武庫川女子大学薬学部	野坂 和人
姫路獨協大学	川井 真好
就実大学薬学部	塩田 澄子
福山大学薬学部	田淵 紀彦
広島国際大学薬学部	山中 浩泰
徳島文理大学薬学部	永浜 政博
徳島文理大学薬学部	大島 隆幸
松山大学	牧 純
第一薬科大学	松原 大
第一薬科大学	小川 和加野
福岡大学薬学部	鹿志毛 信広
長崎国際大学薬学部	小林 秀光
熊本大学薬学部	伊藤 慎悟
崇城大学薬学部	横溝 和美
大阪大谷大学	谷 佳津治
大阪大谷大学	見坂 武彦
大阪大谷大学	内井 喜美子
	(敬称 略)